★プロローグ

和真　『星を買いませんか？』

有紀　薄汚い格好をした男が、気安く声をかけてきた。

和真　『興味ありません？星です星。この空の、美しい天体ショーを、あなただけのものにしてみません？』

有紀　何言ってんだろ。と思ったけど…足が止まった。

和真　『興味あります？…いいですねえ！その前向きな姿勢！…あなた、ラッキーです。こんな情報、滅多に手に入りませんから。』

有紀　なぜか心にヒットしてしまった。それはきっと、私が今、こんな状態だからだろう。…２０２４年１２月２７日、金曜日、午後１１時５０分。渋谷駅ハチ公口は、すごい人だった。

和真　酔っ払いのサラリーマン。若いグループ。カップル。

有紀　駅に向かう人、人、人。

和真　冬休み、年末の仕事納め、たくさんの人が仲間や恋人と過ごし、街は解放感であふれている。

有紀　そんな一日を、こんな思いで迎えるなんて、夢にも思っていなかった。

和真　こんな思いで迎えるなんて、夢にも思っていなかった。

有紀　『星を買うって、どういうことですか？』

和真　お、のってきた。…『1月3日、流れ星が流れるのを、ご存じですか？』

有紀　『流れ星？』

和真　『はい。』

有紀　『知りませんけど。』

和真　『知らないんですか？…ええ？』

有紀　『…それが、どうしたんですか？』

和真　『だから、その天体ショーが、あなただけのものになるんです。』

有紀　『え？』

和真　『あなただけのもの。独り占め。』

有紀　『どういうことですか？』

和真　『夜空が見える最高の場所で、独り占め出来るんです。私は、その権利を持ってるんです。』

有紀　『え？』

和真　考えてる考えてる。…『もちろんお金はかかります。まあ、ちょっとだけ値は張るんですけど、でもこんなこと、

滅多にありません。…どうです?もう少し詳しく聞いてみません?』

有紀　『まあ』。私は答えた。

和真　まあ?…今、まあって言った?…ええっと。…『じゃあ、もうちょっとだけお時間いただけません?あと１０分くらい。』

有紀　『ごめんなさい。もう終電が。』

和真　『じゃあ、明日、お会いできませんか?…本当にすばらしいお話を、お伝え出来ますから。』

有紀　本当に?そう思ったけど、別に予定ないし、何かが引っかかったのだ。…『別にいいですけど。』…私は答えた。

和真　すぐにスマホを取り出す。『ＬＩＮＥ交換しましょ?』

有紀　私はＱＲコードを出す。

和真　すぐに登録。スタンプを送る。届いたことを確認。…『明日、ご連絡いたします。』

有紀　『わかりました。』私はその場を立ち去る。

和真　見込み客を捕まえた私は、ホッとしていた。

有紀　京王井の頭線、渋谷駅に移動。身動きが取れないほど、駅は大混雑だった。

★第１場

和真　私はハチ公口に残って、人の流れを眺めていた。そしたら、今年一年のことが、走馬灯のようによみがえってきた。私はどうしてこんなことをしているんだろう。俺は何をやっているんだろう。

有紀　京王井の頭線。各駅停車吉祥寺行き。混雑した車内は、窮屈で居心地が悪い。

和真　２０２４年が始まった頃、こんな1年になるなんて、夢にも思っていませんでした。今頃充実した毎日を過ごしているはずでした。私はついこの間まで、お笑い芸人だったのです。正確には今でもそうです。芸能事務所にもまだ所属している。でも、社会の変化の中で、ゴロゴロと坂道を転がり落ちて行ったのです。

有紀　下北沢に到着する。自宅の浜田山まであと１０分。相変わらず混雑。

和真　私は、タクマ・カズマというコンビを組んでいました。２０１９年１２月、コンクールで入賞。新しい芸人が次々と登場する中、ぽんぽんと仕事が入り始め、少しずつメジャーへの階段を登っていきました。そんな中、新型コロナウィルス感染症拡大。入り始めた仕事を一気に失い、２１年、２２年、２３年、何とか耐え忍んで活動を続けるも、２４年、今度は物価高。９月、マネージャーから一本の電話。待ち合わせ場所に行くと、明らかに顔つきが変わった琢磨がいました。琢磨はもうここまでだと言いました。実家の商売を立て直すため、九州に帰らなければいけない、そう言いました。琢磨の実家の老舗」和菓子屋は、小麦粉やお米の価格高騰で、倒産の危機に瀕していたのです。また、こうも言いました。本当はやめたくない、こんな形で夢を諦めるのは悔しい。私と一緒に、夢をつかみたかった。泣きながら話しました。私は琢磨を説得しましたが、親は見捨てられない、結局、その結論に辿り着く。その場でコンビ解消に同意。賞を取り、一度夢を掴みかけたにもかかわらず、運命に見放されたのです。

有紀　電車の窓から、流れる景色を見る。そういえば星なんて、最近見る余裕なかった。

和真　その日の帰り道、やり場のない怒りが私を襲いました。なぜ、こんなことになるのか。なぜ、こんな目に遭うのか。私は心に誓いました。運命を見返してやる。こんなことで、私は負けない。琢磨の分まで絶対に成功してやる。そう誓いました。…私はピン芸人としてやり直すことにしました。でも、うまくいきませんでした。こんなメンタルで、いいパフォーマンスができるわけがない。また、私一人では空回り。琢磨のいない私は笑いをとることができ

ず、場を盛り上げることすら出来ず。そのパフォーマンスのひどさから、プロデューサーの怒りを買い、共演者からは白い目で見られ、次の仕事につながらず、再びスケジュール帳は真っ白になり、貯金も底をつき…今日、生活のために、こんなくだらない仕事に手を染めることになった。真っ暗闇。私は今、真っ暗闇にいます。

有紀　浜田山に到着。混雑から解放され、ひとつため息をつく。…帰り道、私はさっきの出来事を思い出していました。どうして、あんな胡散臭い話を聞こうと思ったのだろう。会う約束をしてしまったのだろう。…いや、いいのだ。胡散臭くてもなんでも、私にはきっかけが必要なのだから。…私はピアニストの仕事をしています。ホテルのラウンジや披露宴で演奏するフリーのピアニスト。腕を磨き、人脈を作り、いずれはＣＤを販売したり、コンサートを開いたり、世界に羽ばたくソロのピアニストとして活動するのが私の夢です。でも、新型コロナウィルスの拡大以来、全ての計画がストップしてしまいました。入っていた仕事は全てキャンセル。ホテルは全て自動演奏に変更、披露宴からはお声がかからない。それまで当たり前のようにあった仕事を、私は失いました。

和真　あの人、行けるかも、と目を付けた女に声をかける。ガン無視。そりゃそうだよ。こんな話に足を止める人いないよ。

有紀　なぜこんな目に遭うのか、やり場のない怒りと失望感が私を襲いました。２１年、２２年、２３年。なんとか耐え忍ぶも、２４年、今度は物価高。世界はどこに向かっているのか、私はどうやって生きていけばいいのか、不安で押しつぶされそうになる毎日でした。

和真　次は男にアタックする。またガン無視。全然上手くいかない。

有紀　私は賭けに出ることにしました。ピンチをチャンスに変える。これを機会に、ソロのピアニストとしてデビューしよう。そして、世界に羽ばたくピアニストの夢に挑戦しよう。そう考えたのです。私のような、ホテルで演奏するピアニストが世界に挑戦だなんて、簡単なことじゃないことはわかってます。でも、私が作曲した自信作「夜空」この曲を看板に、勝負に出るしかない。だってもう、ＣＤ販売や配信で稼ぐしか、食べていく方法が見つからなかったから…。私はすぐにレコード会社への営業を始めました。でもうまく行きませんでした。音源を送っても連絡なし。知り合いのプロデューサーに泣きついても、「考えとくよ」とはぐらかされる。そんな中、仕事はほとんど

入らず、貯金は減り、この状況をどう乗り越えたらいいのかわからない。それが今の私。真っ暗闇。私は今、真っ暗闇にいます。

和真　今日はあきらめて、帰る準備をする。社長に電話をする。契約に至らなかった経緯を説明する。『口が達者なはずなのにね。』嫌みを言われる。

有紀　でも、絶対にチャンスはやってくる！ソロデビューの夢を叶え、暗闇から脱出する日はきっとやってくる！そのことを信じて、どんなに小さくてもいい、光を、とにかく光をつかみたくて、つかみたくて…きっかけを、探していたのです。

和真　私はターゲットを彼女に絞り、明日の準備をした。

★第２場

和真　翌朝、目が覚めると、すぐにスマホを取り出した。

有紀　ＬＩＮＥに着信があった。昨日の人からだった。

和真　私は待ち合わせ場所と時間を告げて、電話を切る。

有紀　支度をして、待ち合わせ場所へ向かう。渋谷、ツタヤ前。

和真　私は喫茶店に案内し、話を始める。…『２０２５年１月３日。しぶんぎ座流星群というのが観測のピークを迎えるのはご存知ですか？』

有紀　『しぶんぎ座流星群？』

和真　『ええ。しぶんぎ座流星群というのは、壁面四分儀座（へきめんしぶんぎざ）という、現在存在しない星座に由来する流星群。うしかい座、りゅう座の境界付近を放射点として、毎年お正月に見られる流星群。ペルセウス座流星群とふたご座流星群と一緒に、３大流星群と呼ばれているんですよ。』」

有紀　『へえ。』

和真　『それで、そのしぶんぎ座流星群が、今年は当たり年なんです。知りませんでした？』

有紀　『全然知りませんでした。』

和真　『特に１月３日午後１１時３０分から４日午前５時頃まで、ピークを迎えると言われているんです。』

有紀　『そうだったんですね。』

和真　いい感じいい感じ。…『方角は東。渋谷で言えば、ハチ公の銅像からＪＲ渋谷駅を見るような方向で空を見上げると、しうんぎ座流星群の方角になります。」

有紀　『へえ。』

和真　『それで、ここからが重要なんですけど…その、２０２５年のしぶんぎ座流星群は…東京の渋谷が、一番見えるんです。』

有紀　『ええ？』

和真　『渋谷が最高の場所なんです。知らなかったでしょう。』

有紀　『本当ですか？』

和真　『ええ。渋谷から流れ星が見えるんです。すごくないですか？』

有紀　『まあ、それが本当ならすごいですけど…本当に、こんなに明るいところから、見えるんですか？』

和真　『流れ星は、市街地のような明るいところじゃなく、山奥や明かりの少ない場所が見つけやすいと言われています。それは間違いありません。でも、明るさのほかに、距離との関係もありますので、それを考慮すると、渋谷が最高の場所なんです。』…全くのでたらめ。そんなこと、あるわけないって。

有紀　『そうなんですか。』

和真　のってきたのってきた。…『確かな情報です。私の知り合いである天文学会の権威ある先生のお話です。間違いありません。メディアに流れていない、ニュースにも流れない、非常に貴重な情報です。』…出る出る。ヤバいぐらい、口から嘘が出る。

有紀　『それで、昨日の星を買いませんかって言う話と、どういう関係があるんですか？』

和真　『いい質問ですね。そう。ここからが本題です。…国道２４６号線沿いに、セルリアンタワー東急ホテルというのがあるのをご存知ですか？』

有紀　『わかります。』

和真　『あそこの最上階である４０階に、夜景が見えるピアノバーがあるんですが、その窓際の席を、１月３日、夜から４日にかけて、私どもがすべて抑えてあるんです。』…こんなところを先に抑えるなんて、社長の商売魂はすごい。…『そこをお譲りします。』

有紀　『夜景が見えるピアノバー。』

和真　『はい。一流ホテルの最上階から夜景を見ながら、午後１１時３０分ごろ、もう二度とないかもしれない、渋谷から見える流れ星を眺める。そんなプランをお譲りいたします。』

有紀　私は、黙り込んで考えた。

和真　『もちろん、お食事は、すべてコースでお付けします。ドリンクも何杯飲んでいただいても構いません。すべて込みの金額。すべてをひとつのパッケージにして、お譲りしたいと思います。』…こんなことができるなんて、社長はいったい、どこのどんな権力者なの？

有紀　『ピアノは弾いても大丈夫なんですか？』

和真　『もちろんです。』

有紀　『そうですか。…ちなみにそれはおいくらですか？』

和真　『３５万円です。』

有紀　『３５万円？』

和真　『はい。』

有紀　『高くないですか？』

和真　『考えてみてください。こんなこと、生きている間にもうありません。渋谷から、流れ星が見えるなんてことは１００年に一回あるかないかのことなんです。それを、一流ホテルの最上階のバーで独り占めできるなんて、こんなチャンスが訪れることはもうないでしょう。』

有紀　私は、また黙り込んで考える。

和真　行ける！…『あなたにぴったりのプランだと思いますよ。』…私は、満面の笑みで言った。

有紀　『一つだけいいですか。』

和真　『どうぞ。』

有紀　『どうしてこんなキャッチセールスのような売り方をするんですか？』

和真　『キャッチセールス。』

有紀　『そんなに素敵なプランなら、普通に販売したらいいじゃないですか。』

和真　『私は、あなたに買ってもらいたいんです。』

有紀　『…。』

和真　『私はこの素晴らしい権利を、どうしても必要だと言う人に買ってもらいたいと思っていました。何せ、１００年に一回、あるかないかのことですから。…私は昨日あなたにお会いしたとき、ピンと来たのです。あなたが渋谷の星を独り占めするのに、最もふさわしいお方だと！』

有紀　なんだかわからないけど、心を見透かされてるような気がした。

和真　『あなたは、この権利を買うのに、ふさわしいお方です。だって、なんか、そんなオーラ出てるし！人の思いは、オーラに出るっていうじゃないですか！』

有紀　『…。』

和真　『あなたは、この権利を買うべきお方です！このチャンスを逃して、どうするんですか！』…超めちゃくちゃな理屈だけど、とりあえずテンションだけは上げて言ってみた。

有紀　『わかりました。』

和真　え？今、なんて言った？

有紀　『買います。』

和真　マジか…マジか…『よろしいですか？』

有紀　『よろしくお願いします』

和真　いいのか？こんなにうまくいっていいのか？…『では、お支払いは、直接受け渡しで行わさせてください。準備が整いましたら、ご連絡いただけますでしょうか。』

有紀　『わかりました。』

和真　商談終了。私はこれで、しばらくの生活が保証される。

有紀　私は夢をつかむために、一世一代の大勝負に出ることにした。

和真　一通り説明して帰ろうと思ったけど、何だかこのまま帰るのは味気ない気がして、少しだけ彼女に聞いてみることにした。…『でも。』

有紀　『はい。』

和真　『どうしてご購入を決断されたんですか?…いや、あまりにもあっさりだったから。どうしてかな、なんて思ったりしまして。』…なんか、ちょっと悪い気がして聞いてしまった。別に聞く必要なかったけど。

有紀　『夢を、叶えるんです。』

和真　『夢を、叶える?』

有紀　『流れ星をバックに私の演奏を聴いてもらったら、良さが伝わって、熱意も伝わって、契約したいというレコード会社が見つかるんじゃないかって思いまして。』

和真　『演奏?レコード会社?』

有紀　『素敵な演奏ですね、って、私の事を認めてもらえるんじゃないかって思いまして。まあ、本当にそうなるかはわからないですけど。』

和真　『何のお仕事をされてるんですか?』

有紀　『私、ピアニストなんです。』

和真　ほお。

有紀　『ホテルや披露宴で演奏するピアニストなんです。でも、こんな世の中になって、全ての仕事を失っていまして。』

和真　『コロナ…ですか?』

有紀　『それも含めた、社会の変化で、と言いますか。』

和真　へえ。なんか、自分と似てるな。

有紀　『でも、このお話をチャンスに変えて、夢を叶える。そして、生活を取り戻す。…だって、ホテルの演奏も、披露宴も、一切の仕事がなくなって、世界がどこに進むのかもわからなくて…これから先…私、どうやって生きていけば…。』…その時、こらえていた感情が爆発した。

和真　『どうしたんですか？』

有紀　どうしてだろう。知り合ったばかりのこの人に、気が付いたら、すべてを話していた。こらえていた不安を、動作を誤ったスプリンクラーのように放射し、すべてを委ねるように、涙も、鼻水も、すべて一緒になったぐちゃぐちゃな顔をして、この人に話していた。…心の器に水を注ぐと、水があふれ出してしまう。私はきっと、そんな状態だったのだろう。

和真　大体の事情を聴いた。彼女の苦しみはものすごく理解できた。だって、私と共通点だらけだったから。でも、私は私の仕事をするだけ。心を許してはいけない。…『大丈夫です。』

有紀　『…。』

和真　『流れ星が、あなたを救ってくれますよ。』…私は、仏の顔を思い浮かべて、その顔で言った。

有紀　『ありがとうございます。』…この人の顔が、仏様の顔に見えた。